

文窓

ふみのまど

神戸大学文学部同窓会 文窓会

会長:池上 淑子

事務局:〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

TEL(078)881-1212(代) FAX(078)803-5529

<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/>(文窓会)

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/>(神戸大学文学部)

9号
2011.9.30



特集/脇田晴子先生の文化勲章受章を祝って

第5回文窓賞 学生レポートコンテスト結果速報

同窓生の近況●岩手から被災地報告

10月29日(土)は六甲台へ! 文学部ホームカミングデイ2011





女性に関する三章

文学部長・人文学研究科長
文窓会名誉会長 釜谷 武志

清々しい季節の到来となりましたが、「文窓会」会員のみなさまには、お元気で活躍のことと存じます。

この1年間の文学部のニュースを、時系列に沿ってご報告いたします。

1) 昨年11月に、文学部の卒業生、脇田晴子氏が文化勲章を受章されました。石川県立歴史博物館長の脇田氏は4回生にあたり、1956年に国史学専攻を卒業されて、日本中世史の研究で多くの業績を上げられました。神戸大学関係者の文化勲章受章は、過去に元学長の西塚泰美氏があるだけで、神戸大学の卒業生では脇田氏が初めてです。

その脇田氏は4月6日、ポートアイランドのワールド記念ホールで挙行された今年度の入学式で、新入生を対象にして「人間みな平等一人種・男女・貧富・身分」のテーマで講演されました。女子学生が少ない時代にあつて、目に見えぬ苦勞をしたこと、にもかかわらず自由に勉強したことなど、自らの経験を豊富に織りまぜながらの講演で、非常に好評でした。文学部でも、5月11日に瀧川記念学術交流会館で、脇田氏と学生、同窓会との交流会を開きました。第一部「学生との交流会」は文学部主催で、学生との対談形式によって、大学入学から現在までの道のりを語っていただきまし

た。第二部は同窓会主催で立食形式のパーティーでした。日本史専修を中心に同窓生が集まり、学生・教員も加わって和やかな雰囲気のもとに進行しました。

2) 昨年10月から今年の10月(予定)までに着任した教員は全部で6名ですが、そのうち、何と女性が4名を数えます。文学部の女性教員は現在10名を超えていて、平成の初めまでは助手を除けば女性教員が皆無であったことを思うと、今昔の感があります。今では大部分の専修に女性教員が在職していて、神戸大学の男女共同参画推進基本計画に掲げる、女性教員比率20%以上というプランを達成できたところです。ちなみに文学部の事務職員は13名ですが、そのうち女性は10名です。

3) 来たる10月29日に、第6回神戸大学ホームカミングデイが開かれます。大学全体の式典に、著名な卒業生の方の講演が組み込まれていますが、今年は文学部の卒業生、中川順子氏が「私の原点、神戸」と題して講演されます。中川氏は社会学専攻で、1988年に卒業された第36回生にあたります。今年の4月から、女性として初めて野村ホールディングスの執行役・財務統括責任者に就かれ、マスコミでも話題になったのは耳新しいところです。

このように、文学部の女性の卒業生は各方面で活躍されていますし、女性教員も数が増えて、教育研究において顕著な業績を上げつつあります。今回紹介したのは、女性に関するトピックスばかりでしたが、男性の卒業生、教員においても活躍されていることを申し添えます。

最後になりましたが、みなさまの益々のご健勝とご活躍を祈念するとともに、文学部へのご支援をお願い申し上げます。



この一年の 同窓会活動をふりかえって

文窓会会長 16回生
池上 淑子

「文窓会」会員の皆様には、お元気で活躍のことと存じます。さて、平成23年度の総会で、私が会長を担当しさらに新役員3名を増強する体制で役員会を運営することをご承認いただきました。引き続き、年代と地域、職域を越えた「絆」を強めることを目指して尽力してまいりますので、皆様にはますますのご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

ところで、今年3月11日に勃発した「国難」ともいふべき「東日本大震災」は未曾有の被害をもたらし、多くの方が亡くなりました。ことに東北地方の太平洋側では、地震、津波に加え目に見えない放射能汚染と、想像を絶する三重苦の被害が出て、今なお復興への道のりは険しいものがあります。犠牲者の方々のご冥福をお祈りするとともに一日も早い復興を祈るばかりです。

この震災での唯一の救いは、被災地の人々がとった見事な行動でした。危険を顧みることなく職務を全うして多くの人々を助けた話も枚挙にいとまなく、あの状況下に励ましあいつつ整然とした規律ある行動は世界中に大きな感銘を与えました。まさに我々現代人が失くしたかに思える「日本人生来の美德」を見せつけられた想いで、「日本人とはこんな民族なのか」と思われた方も多い

はずです。

苦渋に満ちた先の見通しにくい不確実なま、社会の安定的な維持・発展をめざすためには国家としての強い信念が必要です。日本国の心棒となる「国家理念」は歴史や伝統ある文化への深い理解なくして成り立ちません。今あらためて、人文学の果たす役割の意義、大きさを痛感する次第です。

ところで、同窓会では活動の一端として、例年の卒業祝賀パーティーに加え昨年度から新入生歓迎ティーパーティーを開催しています。今春は多数の先生方のご協力を得て、新入生80数名が出席しました。学部生としての自覚と目的を持つ機会となったことでしよう。

また、昨年初神戸大学卒業生として初めての文化勲章受章の榮に浴されました脇田晴子先生に、学部の方、若い研究者に加え、学生達と「知的対話」を交わす機会をお願い致しましたところご快諾いただき、開催することができました。優れた先輩の講和は後に続く研究者や学生達に夢と希望を与え充実した時間を共有できたことを改めて感謝しております。必ずやこの日をきっかけに優れた人文学者が輩出することと思います。

このように文学部と優れた卒業生とのネットワーク充実の機会を得て連携を強めることは、文学部の発展につながるものだと考えております。文窓会会員の皆様にはネットワークを結ぶ意味からも、一層のご支援・ご協力をお願いする次第でございます。

最後になりましたが、文窓会会員の皆様のご活躍とご健勝を心より祈念申し上げます。

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第5回 文窓賞

学生レポートコンテスト 結果発表

神戸大学文学部で学ぶ学生たちのさまざまな生き様・挑戦・ビジョンにエールを贈る〈文窓賞〉レポートコンテストに、今年は8名の応募がありました。9月7日に釜谷武志文学部長、鈴木義和、緒形 康の3名の先生方と文窓会役員による選考会が開かれ、白熱した討議の結果、下記の作品が受賞作に選ばれました。

■ 最優秀賞 (表彰状と賞金10万円) 該当者なし

■ 優秀賞 (表彰状と賞金3万円)

「日本人の美德」

高橋 花菜 (英米文学専修4回生)

「夢から出来た夢、アメリカでのディベート部員生活」

隅野 友加里 (英米文学専修4回生)

「四年間の大学生活、次へのステップ」

森下 絵理香 (日本史学専修4回生)

「人を理解すること、人とわかり合うこと」

近石 壘 (哲学専修4回生)

■ 佳作 (図書券5,000円分)

「クリエイティブな毎日」 姉川 拓生 (英米文学専修2回生)

「少年老い易く学成り難し」 酒井 友樹 (人文学科1回生)

■ 審査委員長特別賞

「今、自然とは」 日比野 有真 (フランス文学専修4回生)

*優秀作の表彰は10月29日の第5回文学部ホームカミングデイにて行います。

*入賞者の受賞レポートは冊子にして同日の文窓会総会時に配布いたします。

◎選考基準: 元気で個性的な学生生活の独創性や発展性に対する評価と、その活動や体験が社会をどれだけ納得させる力があるかによって選考。

◎選考委員: 釜谷 武志学部長(中国・韓国文学教授)

鈴木 義和(国文学教授)

緒形 康(東洋史学教授)

池上 淑子 鞍井 修一 日高 健一 花木 直彦 廣野 幸夫 西川 京子

武藤 美也子 吉田 浩次 宮崎 典久 坂本 直樹 田中 睦子

選考を終えて

今年こそは、と期待したのですが。

「戦後」と同じく「災後」と言う言葉が定着しようとする日本史の大きな節目の年、阪神淡路大震災のご当地大学の学生レポートに若者の意志が強く表現されると期待したのですが無理でした。例年の如く身辺雑記と留学経験レポートに終わっています。「留学」をテーマにしたレポートは今年度も3点、何れも優秀賞に入りました。中には「震災」に触れるものもありましたが、自分の立位置が見られず、志を感じるものもありませんでした。思い出してください。春の選抜高校野球選手権の選手宣誓を。「生かされている命に感謝し全身全霊で堂々とプレーすることを誓います」。楽天イーグルスの本拠地での開幕試合、「絶対に見せましょう、東北の底力を」で締めくくった嶋選手会長の挨拶を。そこには強い共感と深い感動がありました。14歳の少年が災害跡地に立って「この日本を立て直すのは僕たち」と言って海を見つめていました。天災に加え核の黙示録から66年、日本は再び放射能と言う人災と戦っている。残念ながらどのレポートにも触れられていません。世界史的に見ても「アラブの春」の年です。社会の大きな流れを自分の問題として捉える力をもっともっと養って欲しい。今ある悲劇を日本再生の転換に、再建と言う大きな希望に変えられるのは、若者の持つ高い志です。

レポート8点の中で一番侃々諤々したのが日比野有真君の「今、自然とは」。トップ点を付けたのが5名、7点を付けたのが6名と全く評価が分かれた、そこで審査員特別賞。(鞍井記)

「脇田晴子先生を囲む会」報告

2011年5月11日、神戸大学の卒業生ではじめて文化勲章を受章(2010年11月)された脇田晴子先生(滋賀大学名誉教授、現石川県立博物館長)をお迎えして、文学部学生との交流会、および同窓会の方々と交歓会を開きました。

第一部「学生との交流会」は文学部の主催で、瀧川記念学術交流会館2階に教員・学生・同窓生あわせて40名前後が集まりました。釜谷武志文学部長のあいさつと脇田先生のご経歴の紹介の後、西洋史学専修の高田京比子准教授の司会のもと、まずは脇田先生ご自身に、これまで歩んでこられた道のりについてお話いただき、その後学生からの質問に答える形で、さらに広く深いお話をいただきました。その詳細を、脇田先生のご発言を中心に以下のようにまとめました。



1 神戸大学の学生だった頃

脇田 私は9人兄弟の8番目の子どもで、弟が一人おりましたが、4歳のとき亡くなりました。小さい時はほったらかしで、知能の発育が遅く、学校での出来も良くなかったのですが、親は私が成長していくのを見て、他の兄弟の前で、「あなたは生きていてくれるだけで親孝行だ」と言いました。その後、いつも兄弟から、「あ、晴子ちゃんが親孝行してる!」「何してる?」「息してる」なんてからかわれたものです(笑)。

終戦のどさくさを利用して、神戸高校の前身の学校にもぐりこみ、いろいろあって、それから大学に入学しましたが、姉さん方は女専に行ったから、均分相続の原則にもとらないように、私は短大に行くべきだと言われていました。しかし私は、短大は2年間でたくさん勉強しなければならないから絶対いやで、なんとか大学に行かせてもらいましたが、木曜日には洋裁塾に通うことを約束させられて、そのためその時間にあったフランス語の授業に出ることが出来ずに単位を落としてしまい、条件付きでやっと仮進学で専門に行かせてもらうありさまでした。当時の成績はむちゃくちゃで、神戸大学では卒業して20年たったら学籍簿を焼いてしまうときいていたので、今日は安心してやってきたのです(笑)。いやなことをすることができないわがまま育ちだったんですが、専門に入ってから歴史の勉強はちゃんとしました(笑)。

日本史を選んだことについてですが、私は横文字が苦手だったので、国文学か日本史に行こうと決めていました。でも、どちらがいいか、ころころ気持ちが変わって、何回も申し込み内容を差し替えました。あまりにも差し替えるので、事務の方が、「あんたな、申し込み期限の最後の日の4時か5時頃に出してくれ」と仰いました。日本史に決めたのはガイダンスで、日本史の方が性に合うな~と思ったからですが、今思い返すと、最後のガイダンスが日本史のガイダンスだったんですね(笑)。

当時の大学生の男女比率は6:4ぐらいで、文理学部文科90人のうち、20人か19人が女性でした。社会学が1人、歴史が1人か2人、あとは全部国文、英文でした。国文の同級生とは今でも一緒に旅行するほどの仲良しです。日本史は確かもう1人いたのですが、「良縁があつて」やめました(笑)。私も良縁があつたら早くやめていたかもしれません。女性が数少ないものですから私がいると男の学生さんたちが大恐慌をきたして、「女性がいるから礼儀正しくしなきゃ」と思ったようです。

Q その頃の西洋史と日本史はどんな関係でしたか?

脇田 西洋史は1年上に2人いらして、1年下に東洋史も含めて歴史に5、6人いました。一緒に旅行したりして、仲が良かったですよ。勉強の話はあまりしませんでしたね。

当時のゼミ(講読)は女1人、男5人でした。私は教養時代は勉強しませんでした。専門になってからは勉強好き、勉強し過ぎて「にせ肋膜事件」を起しました。お医者さんから「肋膜」だと言われて寝ていたのですが、友達がみんなお見舞いをいっぱい持ってきてくれた後で、「肋膜じゃない」ということがわかったんです(笑)。専門の勉強は大好きで、卒論が評判が良かったので、雑誌に載せてもらいました。

2 日本中世史の研究者として

Q なぜ中世史を選ばれたのでしょうか?

脇田 私は子どもの頃から、高田さん(高田京比子准教授)の大叔父さんに仕舞と謡を習っていました。また、その後、おじいさんには鼓と笛を習いました。そんな関係で日本の中世の文化史、芸能史に興味があったんです。でも、当時は社会経済史が研究の基本で、芸能史は応用問題と思ったんで、まずは社会経済史ということで、経済史をやりました。この大学が『兵庫史学』という雑誌を出してまして、それに載せてもらいましたが、有名な先生方から大変な激励の手紙をいただいたので、嬉しくなって、「やろう」と思ったんですね。当時は戦後すぐの時代で、婦人会が盛んで、高群逸枝の『日本女性史』と、井上清さんの『日本女性史』を読む会というのに誘われて出席しました。「あすなろ」という芦屋の婦人会は意識の高い、女専出の人の多い鋭い会でしたが、質問が矢のように飛んできて、いつも「次までに調べて来ます」と下を向いて言ってばかりおりました。でも、女性史の研究をやるのはもともとずっと後ですね。女性史は概説は書けても研究はなかなかとっかかりがつかめないもので、中年になってからやっと手がついたという感じです。婦人会では謝礼をもらってはいけないということで、謝礼の代りにいただくおばさんたちの手芸品にいつも包まれておりました(笑)。

Q 途中で研究に対するモチベーションが下がった事はありませんでしたか?

脇田 やるかやらないか、ということでは悩まなかったです。歴史に行ったのは向いていたんでしょうね。姉さん方は女専で、私だけえらそうなことを言って大学に行かせてもらったので、「大変だ」なんていうと「じゃやめなさい」とすぐ言われるのがわかっているので、弱音を吐けませんでした。反対意見というのは、けっこう、はりきる材料になるんですよね。いつも鎧をかぶっていて、「前進あるのみ!」という感じでした。

面白いエピソードがあるんですよ。私の家は

西宮で20代続いたと称している旧家なんですね。神戸大学の歴史の先生方が『西宮市史』の編纂をされていたんですが、あるとき市役所の方が、「この家の子は兄弟皆よくできた」というので、それに対して神戸大学の助手さんが、「末っ子の娘さんも良くできますよ」と言って下さったところ、「へえ、あの末っ子だけができないという話だったのに。神戸大学ではあの子も良くできる方なんですか」と驚かされてしまったということです。「神戸大学の値打ちを下げてしまった」といわれたりしまして、皆さん安心したでしょう?(笑)

女性研究者の少ない時代でしたが、大学院に行くことがどういう意味をもつか、あまり深刻には考えなかったです。でも、食べていけるか、専門職につくことができるかということについては不安でした。男子学生でもね、当時、京大の大学院には、大学院を出て浪人しているのが13人、大学院生が12人、合計25人、とぐろを巻いていたんです(笑)。マスターを出た時に結婚しましたんで、夫はずっとオーバードクター、4年か5年やったですね。でも予備校でかせいでましたし、私の奨学金と夫の予備校の収入でなんとかやってました。当時予備校の収入はかなりよくて、就職するより給料が良かったんじゃないですかね。結局、先行きなんて考えてたら生きていけないから考えないことにして。勉強はよくできたと思います。

論文の審査については日本史の学会は公平だったと思います。学閥とかジェンダーは関係ありません。東大の『史学雑誌』や京大の『史林』のような大きな雑誌とは別に在野の歴史学研究会、日本史研究会があって、それらは学閥なしにやっていく、そうすると『史学雑誌』や『史林』も割と公平になってくるんですよ。歴史学は割と公平な社会だった。すぐに学生委員にさせられて、そういう中で鍛えられることもありました。といって女性差別はなかったです。きちっと評価してくれたし、きちっと批判されました。

ただ、就職については全然だめでした。就職のため



脇田先生を囲んで祝う文芸会役員の皆さん



の申し込みをしようとしたとき、先生に「きみまで来るんかね?」といわれたり、候補に出してください、とお願いに行くと、「きみたち(女性)を出すと、うちが(他の大学に)負けるじゃないか」と言われたりして、「何てことだ」と思いましたね。たまたま新しい女子大(橘女子大)ができたとき、哲学専門の学長の方が呼んでくださったので助かりました。教授はみな男性、あとは国立大学を定年退官された先生方、それと助教授・講師は男女半々6人ずつでした。「理想的な男女共学だ」と私がいうと、男の先生が嫌な顔をされましたが(笑)、それでもドクター出てから5年目ぐらいですよ。その間は浪人してた。そのうち2年は奨学金、その後林屋辰三郎さんの下で『京都市史』(平安・鎌倉・室町)の都市と商業のところの編集に声をかけてくださいました。史料調査でも何でも専門の事を全部やらせてもらって、論文を書くかわら市史を書き、ということでもとても幸せでした。浪人の5年間とその後の5年間、合計10年くらいやっていましたから、それはとても幸運でした。

3 国際交流経験、家庭、これからの夢

脇田 私の専門は日本中世史ですが、2、30年前ですけど、オックスフォード大学に、東大の女性学士第一号という、私のお姉さん株の先輩が行っていて、その先輩のところに夏休みに転がり込んだことがあったんです。そのカレッジは1年に1人世界の女性研究者を呼ぶ慣行があり、それで後に呼んでいただいて行きました。どこの国に行っても日本史研究者、日本文学の先生がいるものです。そういう先生が寄ってこられて、色んなサービスマンもしていただけるし、その代わり古典と一緒に読んであげるとか。私も日本史に行った時、これで外国とつきあうようなことはもうお終いだ、と思ったのですが、逆にどこの国にも日本史研究者というのはおります。それからアメリカの大学に夫婦で呼んでもらって行ったり。外国行っても、能楽論の人って、案外日本史研究やっている人の比重が大きいんですよ。道楽が役に立つこともありますね。

専業主婦?全然考えたことはありませんでした。私は家

事は嫌いじゃないし、料理は好きなんですけど、しかしあれを一生やるのは……。母が県立一女卒で、野坂参三夫人(モロゾフかコスモポリタンの娘)や高良とみ(参議院議員)が同級生でした。うちの家は戦前から自由放任主義でしたので、大学院に行くといっても反対されませんでした。その代わり、金は出すから結婚でも何でも自分でやってくれといわれました。その時はちょっと不安になりましたが、ここで不安な顔を見せたら馬鹿にされると思って。それでも3、4時頃まで話し合った記憶があります。えらそうなことを言った手前、弱みは見せられないと思いました。

オックスフォードでは女子カレッジに行きました。都立大の三好陽子さんが先輩格でした。夏休みからお正月明けまで、半年間いました。勤務校や向こうで、「日本史が何の勉強に行くの(来たの)?」ていわれましたけど、非常に勉強になりました。

外国人の日本研究?それはね、古文を読んだり解釈するということは、日本人の方が得意ですよ。しかし、向こうの学問には独自の発想があります。これはイギリス人でないと気がつかないことだな、というような。アメリカでもシアトルのワシントン大学とか、『アナル』の拠点のフランスの社会科学高等研究所、色んなところに行きました。けっこう能楽の研究は盛んなんですよ。南仏の乗馬学校の先生が『敦盛』を上演していたりしましたよ。インドも行きました。

Q 子どものお世話との両立はどのようにされていましたか?

脇田 私は非常に恵まれていたんです。上の子が小学校だった時に、海水浴に連れて行ったらそこで出会った娘さんがすごく良い方で、息子が私に寄りつかなくなっていた子について回ったの。「これはいい」と思って、「うちへ来たら大学に行かせてあげる」といってスカウトして連れて来たの。その子を女子大へ入れまして、4年間、朝1時間と夕方4時間分の給料を払って、その子は大学を出た後、保母さんになりましたが、その後もずっと何かあると来てくれるんです。子どもたちは彼女になつて、私にはなついてくれない。私あんまり子ども好きじゃないから……。笑。

ソビエトで学会があったときも、お姑さんが助けに来てくれて、それとお姉ちゃんまで面倒見てくれたし、それは恵まれていたと思います。でも小さい時は大変でした。原稿の締め切りはあるし子どもは夜泣きするし、どないしよう、と思って。今から考えたらのど元過ぎれば熱さ忘れる、という感じですけど。でもそれはそれであんなにかなるもんですよ。

でも、その子が就職してから困った時があるんですよ。明日は研究発表があるのに、子どもを預けるところがな



司会の高田准教授と脇田先生

「二三日やったら私が預かりましょう」。「はあっ」って言うてすぐに押しつけて、その人に、長男だけじゃなしに次男も三男も連れて行って、ご主人が定年退職した校長先生だったのですが、そこでお世話してもらったんです。何でも厚かましくいかないといけません(笑)。きつとびっくりして声掛けようと思う程、私が悲観的な顔して歩いてたんでしょね。そういうこともありました。

今は、たまたま年金のつく賞をもらったので、後続の女性研究者のために、基金を作っています。

Q これからの夢は何ですか？

脇田 今、岩波新書で『日本女性史』というのを書いています。ちょうど織豊政権の前まで行きました。そこまでは書けるんですけどね、近世近代というのは、夫が近世を専門にしているものですから、不可侵条約で避けてきたもので、ちょっとしんどいんですけど、それを今年中に仕上げたいというのが予定です。それから、私も年なので、これまでばらばらになっているものを、まとめていきたいと思っています。女性史の方は書きにくいところがまだ残っています。夜逃げしたい気持ちなんですけど、何とかやっていきたいと思っています。

第一部の報告は以上ですが、第二部「同窓生との懇親会」においては、同窓会の主催で瀧川会館1階に場所を移し、立食形式のパーティが行なわれました。脇

田先生と同期の方々をはじめ、多くの同窓生の方々が参加され、教員・学生も交えて楽しいひと時を過ごすことができました。最後に同窓会から脇田先生に記念の品が贈られ、参加者で記念撮影を行ないました。当日は激しい雨でしたが、それを忘れてしまうような熱気のある、楽しい時間でした。

脇田先生は今年77歳ですが、大変お元気で、女性

が研究者になることが難しかった時代に、つねに前向きな姿勢でご自身の世界を切り開いて来られた過程を、ユーモアたっぷりにお話下さいました。先生の若い頃のお話からは、戦前の関西の知識階級の人々が持っていたリベラルな雰囲気の一部がうかがわれ、そのような環境こそが脇田先生の学問の土壌をなしていたことを実感しました。また、林屋辰三郎氏に代表される戦後京都の自由闊達な雰囲気も、脇田先生の学問形成に大きな影響を与えていることも良くわかりました。それらの環境の中で、脇田先生の前向きで不屈のパーソナリティがよく発揮され、数々の困難を克服し、国内のみならず国際的にも広く知られた、数々の業績が残される結果を生んだのだと思います。

「認識においては悲観的であれ、しかし意志においては常に楽観的であれ」という箴言がありますが、特にその後半を体現されたような脇田先生の姿勢から、我々が学ぶべきことは多いのではないかと思います。

*脇田晴子先生は1934年西宮市生まれ、1956年神戸大学文学部史学科卒業、1963年京都大学大学院博士課程単位取得退学、1967年の京都橘女子大学を振り出しに、鳴門教育大学、大阪外国語大学、滋賀県立大学で教鞭をとられ、現在は石川県立歴史博物館館長の職についておられます。2003年に『日本中世被差別民の研究』で角川源義賞を受賞、2005年文化功労者章、そして2010年に神戸大学の卒業生でははじめての文化勲章を受章されています。

『日本中世都市論』（東京大学出版会、1981年）『日本中世被差別民の研究』（岩波書店、2002年）『天皇と中世文化』（吉川弘文館、2003年）等の研究史に残る学術書のほか、『室町時代』（中公新書、1985年）『中世京都と祇園祭』（同、1999年）『物語 京都の歴史』（脇田修氏との共著、同、2008年）等、数多くの一般向けの著作も書いておられます。

（脇田先生のお話と当日のレポートを、国文学准教授 樋口大祐先生にまとめていただきました。）



学生の皆さんと記念写真

大阪城天守閣での学芸員生活25年

北川 央(大阪城天守閣 研究主幹/国史学32回生 昭和61年修士課程修了)



私は神戸大学文学部、大学院文学研究科で、高尾一彦先生・戸田芳實先生・鈴木正幸先生・藤井譲治先生・横田冬彦先生から指導を受け、日本史学を学びました。日本古代史を専攻し、卒業論文も、修士論文も古代史で書きましたが、修士論文提出後しばらくして自分の古代史研究に行き詰まりを感じるようになり、思い切って近世史に転向しました。1987年に学芸員として大阪城天守閣に採用され、まもなく学芸員生活25周年を迎えます。

私が就職した頃、大阪城天守閣はちょうど世代交代の時期にさしかかっていたため、私は就職6年目で学芸部門の責任者となり、それからでも既に20年の月日が経ちました。

私は、学生時代に文化財保存の市民運動に参加した経

験があるのですが、当時はバブルへと向かう好景気の真ただ中にあり、経済優先、開発優先で、文化財保存運動は各地で敗北を重ね、かけがえのない貴重な文化財が次々と姿を消しました。そうした苦い体験を通して、偉い先生方がいくら声を大にして文化財の大切さを訴えても、簡単には市民合意を形成できないということを痛感しました。ならば、同じ過ちを繰り返さないためには、どうすればいいのか。結局は、多くの人々に歴史に関心を持ってもらい、文化財の価値を認識してもらうしか方法はありません。それにはまず、歴史のおもしろさや文化財の魅力を伝える必要があります。歴史に興味のない人を振り向かせないといけないのです。そんな思いで、私はこの25年間、大阪城を舞台にさまざまな取り組みを続けてきました。

豊臣秀吉の活躍した時代や大阪城の歴史についての調査・研究、大阪城天守閣での特別展・テーマ展などの開催はもちろん、一般市民向けの講演や執筆活動も積極的にこなし、NHKや新聞社などが主催する全国巡回展の企画にも数多く携わりました。

また、大阪城公園や周辺の上町台地一帯を舞台に、「大阪歴史三景」「オーサカキング」「大阪・上町春めぐり」といった大規模な歴史・文化イベントを開催し、私自身は総合プロデューサー的役割を果たしました。2004年から2008年まで毎年夏に開催した「オーサカキング」では、9日間に90万人もの人々が大阪城を訪れました。「大阪歴

平成22年度卒業生からの近況コメント

文窓会に新しく仲間入りしました！ 顧問をしているマンドリン部が全国大会で優秀賞を受賞。



私はこの4月から、地元で教職についています。社会人1年目とはいいいながら、生徒にとっては「先生」。甘えは許されないのだと気を引き締める毎日です。

国語科はいわゆる主要3科目ですので、一つのクラスに対する授業時間数が多くなります。生徒たちの気分の浮き沈みなど、教壇に立っているだけではわからないことも多いのですが、授業だけでもこうして長い時間を共有できる環

土岸 礼佳(あやか) 国文学専修卒業

境であることは恵まれているのだらうと感じています。

時間の共有という点で、クラブのことをお話ししたいと思います。現在はマンドリン部と天文部の顧問をしています。この夏、マンドリン部は全国大会と全国総合文化祭に参加しました。中でも、優秀賞を受賞した全国大会は非常に感慨深いものでした。ここ十数年の間は、出場はするものの結果はふるわず。念願の優秀賞に部員全員が涙を流して大喜びしました。「苦しいこともたくさんあったけど、やめないでよかった。」そう話した3年生は大会を最後に引退でしたが、さすがに笑顔で送り出すことができました。

学校というのは子どもにとって、非常に長い時間を過ごす場所です。その一瞬一瞬が大切な思い出になるのだということを日々実感しています。そこに自分が関われることを誇りに思うと同時に、私自身も彼女たちのように素直な気持ちで一日を大切に過ごしたいと思っています。

史ウォーク」「熊野街道ウォーク」「大阪ウォーク」「KANSAIウォーク」といった、史跡・文化財を訪ね歩くウォーク・イベントも多数手がけてきました。毎回数千人、多いときには2万人もの参加者がありましたが、どうしても高齢者層に偏りがちになるため、子供たちや親子連れにも参加いただきたいと思い、アニメのキャラクターを使った「名探偵コナン ミステリー・ウォーク・ラリー」「忍たま乱太郎 クイズ・ラリー」なども企画しました。まさかコナンの謎解きストーリーを私が考えているとは誰も想像しなかったでしょうね。

テレビの歴史番組や時代劇の監修などにも数多く携わりましたが、とりわけNHKの「その時歴史が動いた」と朝日放送の「歴史街道」では、番組の企画段階から深くかかわるなど、アドバイザー的役割を果たしました。

近年はOSK日本歌劇団のミュージカル「真田幸村～夢・燃ゆる～」の制作を手始めに、同歌劇団や関西俳優協議会など、いくつもの舞台作品を手がけ、今年5月に公開された話題の映画『プリンセス トヨトミ』でも歴史監修を務めました。



その他、私は近世の庶民信仰史も研究テーマとしているのですが、伊勢信仰の普及とのかかわりで研究対象としていた国指定重要無形民俗文化財の伊勢大神楽が、廃絶の危機に瀕したため、自ら後継者育成に乗り出しました。幸いそれが成功したことで注目を集め、国立劇場からの要請で、2005年から伝統芸能伝承者養成研修講師に就任し、伝統芸能の保存と継承に努め、海外への紹介にも力を尽くしています。

こうした私の取り組みが少しは知られるようになったのか、近年は、地域の歴史や伝統的な街並みなどを活かしたまちづくりをしたいので力を貸して欲しい、といった声も多数寄せられるようになりました。

文化財保護に市民合意が成立する成熟した社会の到来が近づきつつあるのであれば、ほんとうにうれしいことです。

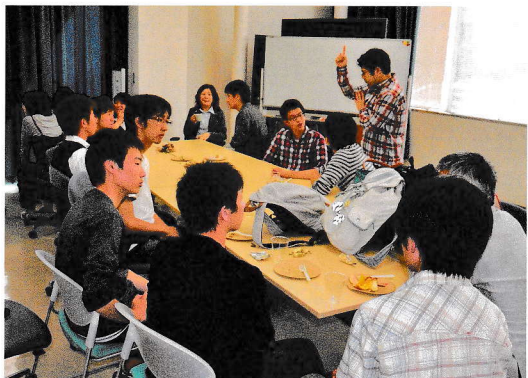


「真田幸村～夢・燃ゆる～」で主役を演じる
OSK日本歌劇団トップスター、桜花昇（現・桜花昇はる）

文学部同窓会「文窓会」主催 ＜新入生歓迎ティーパーティー＞が大盛況

去る5月18日(水)午後3時30分より、文学部本館1階にて文窓会主催の新入生歓迎ティーパーティーが開催されました。

このパーティーは、新入生の皆さんが目的意識を持ち充実した学生生活を送ってほしいという願いのもと、1年生の段階から各専攻がどんな研究活動をするのかを先生方から直接聞く機会を提供しようということで、昨年からはまったもの。入学手続き会場でのPRと学内の看板などの効果でしょうか、多数の新入生の



参加を得、文学部長をはじめ多くの先生方にご出席いただきました。文窓会池上会長、鎌谷文学部長の挨拶に続き、各専攻別に設けた先生と学生とのコミュニケーションの場では、ノンアルコールの茶話会でしたが、たいへん賑やかで和やかな会となりました。

被災地報告

岩手朝日テレビ 報道制作局報道制作部
塚本京平（社会学専修 平成22年卒業）

はじめに、東日本大震災で命を失った方々に心から追悼の意を表します。

2011年3月11日、午後2時46分。

盛岡市内で情報番組の中継準備をしていた私たちを、巨大地震が襲いました。マグニチュード9.0。大きく、強く、いつまでも止まらない揺れ。すぐに発令された大津波警報。地震発生から5分と経たないうちに車を沿岸へと向かわせていました。

72時間コマーシャル無しで続いた全国放送の震災特番。リポーターとして、高台にある大船渡市役所から、ただ自分に見えるものを話し続けました。海岸から2キロは離れているのに、すぐ近くまで津波が押し寄せた形跡。道路の真ん中まで流され、車の流れを完全に防いでいる家、発生から1日を過ぎても炎の勢いが全く収まらない火災、そして余震のたびに大きな音を立てる緊急無線、いつまでも消えない警報…どれほど映像を見ても、どれほど取材を重ねても、あの日何が起こっていたのか、私たちにもいまだわかっていません。

震災発生から半年近くが経ちました。いま私は中継や企画、毎日のニュース取材で岩手県の内陸と沿岸を往復する日々を過ごしています。この原稿も陸前高田市と大船渡市で取材を終えたあと、沿岸の宿で書いています。



日々のニュースを見ていると、最近は明るい話題がかなり増えてきたように感じます。仮設住宅の完成や避難所の閉鎖。沿岸の街に新しくコンビニエンスストアやスーパーマーケットが建ち、夏の高校野球も被災県で無事実施されました。ニュースで人々の笑顔を伝えられるとき、私たちも笑顔になっています。沿岸の街は少しずつではあるものの、確実に復興へと向かっています。

しかし…どれだけ街がきれいになっても、以前のまの姿はもう戻ってきません。美しい三陸の風景や活気のある漁業市場。たとえ形が元通りになっても、人々の心の傷は消えることはないのです。

あの日から1週間が経った3月18日、私は市民の台所、魚菜市场が再オープンしたという取材をするため、岩手県沿岸北部の宮古市を訪れました。中継が始まろう



かというとき、「すみません…」という声が聞こえました。振り向くと1人の女性。消えそうな声で「息子の居場所をご存知ないでしょうか」と言われました。本番終了まで待っていただくようお願いしましたが、中継を終えると女性の姿はありませんでした。市場内を必死に探し回り、その場にいる方全員に避難者名簿の閲覧方法などを伝え出発しましたが、伝言は女性のもとに届いたでしょうか。あのときもう少し話が聞けていれば…と、いまだ悔いが残っています。

この女性だけではありません。身内を失った方、行方がまだわかっていない方。どれだけ復興のニュースを見ても、明るい気持ちにはなれないでしょう。直接の被害を受けることがなかった私たち自身も、いまだ毎日のようにあの日のことが思い出されます。しかし、私はそれが当然であり、そうでなくてはならないとも思っています。

私たちが卒業した神戸大学のある神戸市は、1995年の阪神・淡路大震災で甚大な被害を受けました。私も大学時代、神戸大学ニュースネット委員会に所属する記者の1人として、4年間にわたり阪神・淡路大震災の報道に携わってきました。何年取材をしても、1月17日に黙祷を捧げに来る方々は皆さん同じことを話されます。「この記憶を私たちが忘れてはならない」。今となって、その方々の言葉が思い出されます。

震災の被害を目の当たりにしたその瞬間から、私たちはこの日を語り継ぐ使命を背負ったのです。神戸の方々が阪神・淡路大震災の記憶を語り継いでいるように、私たちもこれから生まれてくる世代に、この悲劇を知らない世代に、この時代、この日に何があったのかを伝えていかねばなりません。

私は東日本大震災が発生したこの日に、岩手県の放送局で働いていたことを天命だと感じています。背負った使命を果たすため、私はこれから何年、何十年にわたっても、2011年3月11日という日に何が起こったかを伝えていく覚悟です。阪神・淡路大震災と東日本大震災という2つの震災報道に携われた私が話す映像が、私が書く言葉が未来に残ることで、将来の世代が震災を少しでも知るきっかけになればと思います。

新しい岩手の街が、東北の街が新しい姿を見せ、人々の心からの笑顔がニュースで伝えられる、そんな日が1日も早く訪れることを、日々祈っています。

東京支部便り

【神戸大学東京六甲クラブ】が発足！

2011年4月より、神戸大学凌霜クラブが発展的に改称し、神戸大学東京六甲クラブが発足しました。
名実ともに神戸大学全学部(11学部あり)の同窓会クラブとなりました。従来同様のご利用をお待ちしています。
この新クラブの会員募集を行っていますが、8月末現在で文学部は22名の方が会員として登録されました。誌上をお借りして御礼申し上げます。(昨年は11名でした) 更に会員数増強を求められています。ご協力お願い致します。

文窓会会員の皆様、誘い合わせてご参加ください。

神戸大学文学部東京支部第八回同窓会(文窓会)及び 木曜会のご案内

1) 同窓会:日時:2011年10月27日(木)14時より17時まで
会費:1,000円(茶話会)

議題:「①凌霜クラブの改革について ②今後の同窓会の運営について ③その他文窓会の現状報告」& 歓談
(茶話会は定席としますが、そのあと18時までは自由にご歓談ください。)

2) 木曜会:同日 18時より20時ころまで
2010年度文化勲章受章者・脇田晴子様(※)による記念講演会
講演内容:「日本の中世の女性」および懇親Party
会費:4,000円。但し非会員は5,000円、
平成10年以降の卒業生及び女性は3,000円。

開催場所(同窓会&木曜会ともに):
神戸大学東京六甲クラブ(旧名:凌霜クラブ)
住所:千代田区丸の内3-1-1 日比谷帝劇B2
電話:03-3211-2916 Fax:03-3211-3147

※脇田晴子様の略歴:

- 1956年(昭和31年)神戸大学文学部史学科卒、京都大学大学院文学研究科修了、文学博士。
- 大阪外国語大学日本語学科教授、滋賀県立大学名誉教授、城西国際大学客員教授、石川県立歴史博物館館長。
- 中世史が専門、商工業論、都市論等から、女性史、芸能に及ぶ。
- 幼年時より能楽関係の仕舞を、中学生時代には謡を、高校生時代には小鼓を、大学生時代には笛を学び、能楽シテ13番、子方2番を舞う。
- 著書多数。

受賞:・2003年『日本中世被差別民の研究』で、角川源義賞
受章:・2005年秋 文化功労者・2010年秋 文化勲章受章

東京支部会長:中野裕(36年卒)
副会長:五味尚子(37年卒)
連絡先:中野自宅 Tel&Fax: 045-561-6317
Eメール:y.nakano.1938-panda@d9.dion.ne.jp

中部支部便り

第7回中部支部総会

文窓会中部支部の第7回総会・懇親会が6月11日、名古屋・池下のホテル「ルブラ王山」で、神戸から参加の日高健一副会長、吉田浩次幹事を加え16人が集まって開かれた。今年は名古屋市から山根真理さん(昭和59年、社会学=愛知教育大学勤務)が、初めて出席した。

記念講演は、静岡市にお住まいの国際日本文化研究センター一助教授の劉建輝さん(平成2年、文化学博士課程)が、「激動200年 中国の過去・現在・未来」のタイトルで、日本と中国の関係を語った。劉さんは「中国は近代日本の形成に影響を与え、現在の中国は日本から多大の影響を受けている。両国は支えあう関係にある」と結論を導いた。

懇親会は日高副会長の乾杯発声で始まり、劉さんの著作「魔都上海」を交えて講演への感想や質問、出席者の近況報告があり、それなりにアカデミックな雰囲気の中かで有意義な時間と空間を楽しんだ。

今回の講演・懇親会には経済学部OBの齊藤正和さんも出席した。

(文窓会 中部支部長 勝原 博)



北京便り【5月から8月の雑感】

神戸大学人文学研究科
日本学術振興会北京研究連絡センター
センター長 佐々木 衛(前文学部長)

同窓会の皆さん、人文学研究科・文学部の教職員の方々、大学院生・学部生の皆さん、お変わりはございませんか。

今年の4月から日本学術振興会北京研究連絡センターにセンター長として赴任しました。現在の中国は社会の変化が急激で、日本の生活テンポではその速度に追いつく間がないほどです。現在の中国がどの様に変化しようとしているのか、雑感を記してみました。5月から8月まで一ヶ月に一度の「月記」のような形式を取っています。8月の今の状況から逆に並べてみました。皆さんのご感想は如何ですか。



浙江大学シンポ挨拶(8月)

8月

お盆の休暇(中国には盆休暇はありません)に深圳に行きました。深圳は太陽の光が強く、飛行場に着いたとたん、めまいを感じました。北京は日本の梅雨の様な気候が続き、蒸し暑さの中でぐったりしていたので、太陽の凄烈な光に感激しました。

深圳の第一の繁華街は、古くから市場が建っていた東門です。1980年に新しい深圳を設置したとき、はやりここに「国貿大廈」というシンボルタワー(ビジネスビル、1985年完成、1992年鄧小平南巡談話の場所)を建設しました。その後、都市の発展は東西に広がって、外周部を波が浸食するように、都市の建設が広がっています。広々とした幹線道路は熱帯の緑の豊かな木々の並木を平行させています。

深圳を訪れたのは、今回で3回目です。最初は2000年10月、次は2009年3月、そして2011年8月です。今回の写真を2000年のものと重ねてみると、写真で確認できるのは国貿大廈、新市庁舎、三角形の銀行ビル、地王大廈などですが、周囲にあった旧いアパートや商店はなくなっており、新しい高層のオフィスビルとマンションの建物がユニークな個性を主張する構造で建設されています。ビルに被せられた奇抜なスタイルの屋根、三角形と四角形を巧みに組み合わせたビル、円筒形のビル、黄金に輝くビル、そして、世界中のブランド品を一堂に集めた商業ビルが人を眩目させます。人々が行き交う姿も異なっており、この10年の間に街の様子は一変していました。特に市庁舎の周囲の様子が全く異なっているのが驚

きました。2000年当時の市庁舎の周囲はどこも建設中で、統計局と資料室、本屋を探すために広いビルと渡り廊下を歩き回りました。10年後の現在は、周囲を成長した木々に囲まれ、既にずっと前からこの姿で存在していたかのような落ち着きを醸し出しています。

ではかつての居住地はどの様になっているのでしょうか。南頭は331年に晋朝の県府が置かれて以来、1842年に香港が割譲されるまで、地方の政治的中心でした。今は南門と西門や衙門を文化遺産として残しており、関帝廟が再建されて、観光客を集めています。表通りの町並みと壁は古い写真にあったような姿に統一し、小さなレストランや土産物屋が並んでいます。この中、人々は細い路地を挟んで密集したアパートに肩を寄せ合うように暮らしています。多くの人が観光で訪れるようになったのですが、ゴミの回収システムが十分でなく、下水の設備が良くないようでした。社区建設(社会的活動のセンターと居民委員会の設置、自主的コミュニティ活動)が急がれていますが、この地域の生活環境を整えるためにはかなり大胆な計画が必要ではないかと感じました。大きな幹線道路を挟んで、現代の豊かな生活を表現するような高層住宅が建設されています。急速に拡大して、周辺を飲み込んでいく変容スピードは、アメリカの都市社会学を創設したシカゴ学派も経験しなかったのではないかと推測するところです。

7月

今年の7月の北京は、雷を伴った激しい陣雨が³あり、肌寒くさえ感じる曇天が続いて、うだるような暑さはどこに行ったのだろうと、少々、物足りなく思います。20年も前のことだが、冷房のない部屋でタオルを首に巻いて食べたスイカ、水分は多かったが決して甘いとはいえなかったフットボールのような形をした黒いスイカの味が懐かしい。

今年の7月は共産党創立90周年を迎えた夏でもあった。テレビでは黒い地下組織が暗躍する上海を舞台にしたドラマ、国民政府軍と戦う共産党軍の姿を描いたドラマ、農村で地方権力者と戦う農民のドラマなど、中国革命に関連した番組が目白押しに放映されていました。中国近代史の中で「農民起義」の資料が多く物語るのは、農村の疲弊を背景に、農民蜂起は燎原の火のごとくたちまち地域一帯に広がり、権力の一端を握ったかに見えるが、政府軍による苛烈な鎮圧と農民指導者内部の分裂などで、結局は瓦解してしまう姿でした。これに比してみると、中国革命は、国民政府の正規軍に正面から戦って勝利する戦線、農村で敢行した土地改革による「農地均分」、中国の工業と金融の中核として世界資本に直結していた上海の解放、そして中央政治権力の成立、どれをとって



中央広播台採録(6月)

も奇跡としか思えないような巨大な事業でした。この事業を継続し、そして全国に推し進めていった共産党の存在の大きさは計り知れないところだと改めて考えます。だが、テレビのドラマを見て思うのは、八路軍の戦いぶりにしても、農民の地方権力者との闘争にしても、何か格好良く、スマート過ぎて、「他所」の世界のように感じることです。

私は、何に対して、どこに対して物足りなさを感じたのでしょうか。エドガー・スノーが「ハンニバルのアルプス越えも、これに比べれば休日の遠足にすぎない」（『中国の赤い星』）と語らせた「長征」大叙事詩の歴史舞台の中で、苦難の行軍の中で脱落せざるを得なかった人々、内戦で命を落としたあまたの兵士たち、映画『芙蓉鎮』で描かれた「地保」の人生の変転、これらの人々の「惨め」で「悲しい」姿はどこに描かれたのでしょうか。彼らがボロボロになるまで戦った血糊や泥と汗にまみれた軍服のすえた汗臭さ、そして戦いに疲れた疲労感と未来に託した希望の混淆、これら混沌とした現実、近代的に制度化された都市にはふさわしくないのかもしれない。これら当時の人々の経験はあまりに濃厚な「体臭」を発したために、クリーンな都市に住む現代の若者には、「脱臭化」しないと受け入れられないのかもしれませんが。しかし、私は「彼ら」の体臭こそ理解したい。ごく最近まで、1980年代になって経済の改革開放が謳われるまで、中国社会を構成する現実としてリアリティをもっていたのです。また、「彼ら」の「体臭」は、現在の豊かな生活を目指す巨大なエネルギーとして形を変えているのだと思います。都会を闊歩するファッショナブルな女性たち、豊かな生活を謳歌するセレブな都市生活者たちを理解するために、「彼ら」を「此方」の世界の人として理解したいと考えます。

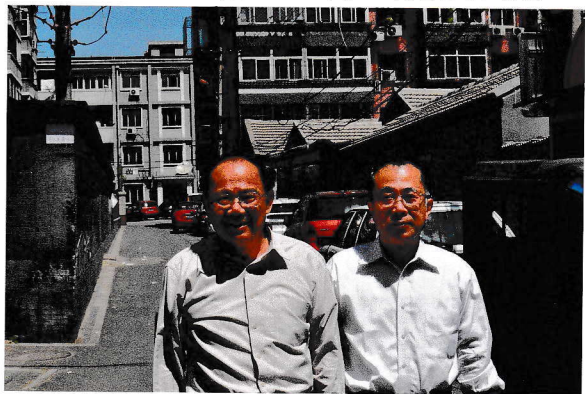
6月

柳絮が飛び交う北京の春を楽しむ間もなく、6月に入ると気温が一気に30度を越えて、並木のつくる木陰を縫うように歩いています。木々の葉は若葉として成長する時間の余裕もなく、太陽の強烈な陽光に晒されています。早春から初夏までのゆったりとした季節の変化を楽しむ日本の時間の過ごし方に慣れている私は、北京の時間の過ぎていく密度に圧倒される思いです。

さて、中国では6月7日～9日にかけて大学入学の統一試験が実施されました。各紙の報道によると、全国の大学入学公募総数は675万人、これに対して応募者総数は933万人でした。志願者に対する入学者の比率は72.3%になり、1977年の6.9%から10倍になったと報道されています。この30年間に大学進学者の増大と高学歴者比率の上昇が著しいものだったことがわかります。とはいえ、「大学も分三六九等（大学にも色々な等級、種々の区別、不平等の待遇がある）」と言われるように、北京大学や清華大学など世界ランクの上位に位置する大学と地方の新設大学との格差が拡大しているのは皆よく承知するところです。入学者のほぼ全員が海外留学を希望し、官・産・学のエリートとなっていく重点大学をめざす受験生と親が果たすエネルギーは、我々の想像を遙かに超えているものと思います。かつての日本もそうであったが、経済と社会の成長期には、行為基準は「右上がり」・「上昇」のベクトルに単純化されていました。経済的な豊かさ、個人の自由、満たされた人生は、高学歴を達成することで実現されるという行動規範です。「優勝劣敗」は明確で、しかも成績を数量化

することが出来ます。私たちの世代の生活は高学歴を達成するための競争のなかに置かれていました。日本の経済が傾いて、大企業での就職も満たされた人生を実現するには十分でないことに、私たちはやっと気がついたところです。さて、現代中国の青少年、そしてその親たちが置かれている状況は、大学間格差が大きく、地域間・階層間の格差が目に見えるだけ、我々日本が経験した「競争」を遙かに超えているのではないかと予想するところです。

この中で、現代の中国の青年たちは自分の経験をどの様に理解しているのでしょうか。「優勝劣敗」の競争の中で行為基準を単純化させるか、あるいは、「三六九等」の格差の現実の中で内省を深めるのでしょうか。今年の作文問題は、北京；「競争と誠実」、上海；「一切都会過去与都不会過去」、天津；「鏡」などでした。この課題に込められた出題者のメッセージに対して、彼らがどれだけ熟慮を重ねたかが問われます。若い人たちが経験している現実を彼ら自身がしっかり見つめた成果が、次の世代の中国を創造していくものと期待しています。



陸學藝先生とご自宅の前で（5月）

5月

今年4月から福西浩前センター長の後任として着任した佐々木衛です。

私の研究は東アジアにおける地域社会に関する社会学的研究です。中国を主な研究フィールドにしているので、北京センター長赴任へのお誘いがあったときは、激変する中国で生活できるまたとないチャンスに恵まれたと真っ先に手を挙げました。着任してまだ1ヶ月ですが、まさしく激変する中国社会のエネルギーに圧倒される日々を過ごしています。

JSPSが関係する研究・教育の面でも、急速な成長を示しています。「211プロジェクト」（1993年制定、21世紀に向けて100余りの重点大学を整備）、「985プロジェクト」（1998年提言、世界先進レベルの先進大学の育成）、「111プロジェクト」（2006年実施、研究・教育の国際化をめざした国際合同研究拠点の設置、世界トップレベルの研究者の交流と招聘）の推進はよく知られているところです。これらのプロジェクトからもわかるように、中国は、重点領域の研究の開発、および、若手研究者に対する国際的な教育システムの構築を、国家プロジェクトとして集中的に推進しています。また、2010年7月に『国家中长期教育改革と発展計画要綱（2010—2020年）』を策定していますが、この中で、北京大学や清華大学などに国家青年英才養成基地において、優秀な学生を育成するための「選抜計画」、さらに、2020年には高学歴者を労働年齢人口の20%にまで向上させる計画を建てています。

最近のこととしては、第十一次全国人民代表大会は、3月

14日に『中華人民共和国国民経済と社会発展第12次5ヵ年計画要綱』を批准しました。この中で、「戦略的に新興する産業」として、省エネ・環境保全、次世代情報技術、バイオ、先端装置製造、新エネルギー、新材料、新エネルギー自動車の7つの領域を指定して、新たな発展を開拓することを謳っています。教育の面では、この戦略的新興産業の開発に資する人材養成を目的に、大学は新領域に関連した学科を創設して、技術者養成に集中的に取り組もうとしています。中でもとくに注目される点は、新設された学科は海外の大学との共同によって運営するシステムの構築を計画していることです。この様に、先端研究領域の開拓、大学の国際化、並びに海外への人材派遣の速度はますます加速するものと予想されます。科学技術振興機構・中国総合研究センターの資料（『中国の高等教育の現状と動向』平成22年版）によ

ると、海外に派遣された人数は、研究者が年間約1800名、大学院生が年間6000名、国費派遣プロジェクトによる派遣は年間7800名に達したと報告されています。これに対して、日本では、日本学生支援機構（JASSO）による派遣者数は毎年約100名、日本学術振興会の各種のプログラムによる海外派遣者数は年間約400名であると記しています。

以上のように、中国の研究・教育へのエネルギーの投入は膨大なものと推測されるところです。重点大学はもちろんのことですが、地方の大学においても、研究設備、教育環境は急速に整えられています。単純な比較は出来ませんが、海外派遣者の人数は日本を遙かにしのいでいるのは事実です。さて、中国の研究・教育のこのような現実を前にして、JSPSはどのような学術交流、研究者支援を実現していくのか、改めて考える必要がありそうです。

文学会（文学部同窓会） — 会計報告 —

平成22年度収支計算書

（平成22年7月1日～23年6月30日）

収 入 総 額	7,264,509	（当期収入 4,447,451）
支 出 総 額	3,748,433	（当期支出 3,748,433）
差 引	3,516,076	（当期差引 699,018）

収 入 の 部	予算額	決算額	差 異	23年度予算額
会 費 納 入 金	3,900,000	3,571,000	△ 329,000	3,750,000
協 力 金	600,000	665,000	65,000	600,000
利 息 金	10,000	56,451	46,451	10,000
総 会 等 会 費	50,000	155,000	105,000	50,000
前 年 度 繰 越 金	2,817,058	2,817,058	0	3,516,076
積 立 金 取 崩 金	0	0	0	0
収 入 合 計 額	7,377,058	7,264,509	△ 112,549	7,926,076

支 出 の 部	予算額	決算額	差 異	23年度予算額
会 議 費	150,000	86,302	△ 63,698	150,000
事 務 印 刷 費	60,000	9,807	△ 50,193	50,000
通 信 交 通 費	150,000	91,240	△ 58,760	150,000
交 際 接 待 費	250,000	250,584	584	250,000
協 力 金 費	1,100,000	843,000	△ 257,000	1,000,000
（学友会費）	(200,000)	(110,000)	(△ 90,000)	(200,000)
（活動援助費）	(400,000)	(233,000)	(△ 167,000)	(300,000)
（学術助成費）	(500,000)	(500,000)	(0)	(500,000)
会 報 費	1,700,000	1,083,944	△ 616,056	1,500,000
歓 送 迎 会 費	650,000	550,240	△ 99,760	700,000
（卒業生対象）	(550,000)	(430,240)	(△ 119,760)	(550,000)
（入会生対象）	(100,000)	(120,000)	(20,000)	(150,000)
総 会 幹 事 会 費	350,000	350,000	0	350,000
事 業 活 動 費	350,000	382,954	32,954	450,000
慶 弔 費	100,000	0	△ 100,000	100,000
雑 費	60,000	48,410	△ 11,590	60,000
積 立 金	500,000	51,952	△ 448,048	500,000
予 備 費	1,957,058	0	△ 1,957,058	2,666,076
支 出 合 計 額	7,377,058	3,748,433	△ 3,628,625	7,926,076

23年度予算書

（23.7.1～24.6.30）

収 入	7,926,076
支 出	7,926,076
	0

平成22年度財産目録

（平成23年6月30日現在）

科 目	金 額
I 資産の部	
（1）通常会計流動資産	
現金	74,940
（中央三井信託銀行）普通預金	20,655
（みなと銀行）普通預金	10,732
（横浜郵便局）普通貯金	608,069
郵便振替	2,801,680
	3,516,076
（2）特別積立金	
（みなと銀行）定期預金	8,051,228
（みなと銀行） "	1,005,530
（みなと銀行） "	1,503,843
（郵便局）定額郵便貯金	8,210,000
	18,770,601
II 負債の部	
（1）流動・固定負債	0
III 正味財産合計	22,286,677

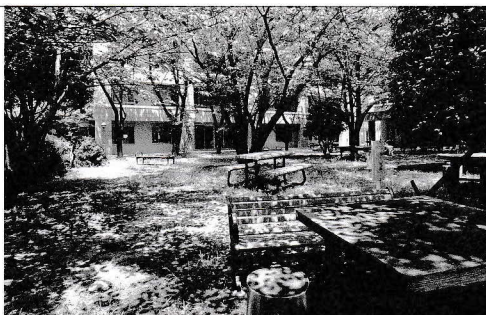
事業年度に係る決算報告書を監査した結果、適正であることを認めます。

平成23年9月7日

会計監査 鞍 井 修 一 印

会計監査 西 川 京 子 印

気ままに本を開いたり
まぶしい空・街・海を眺めたり
友と語り合ったり



あなたも、ときどきは
心の、木陰のベンチに腰掛けて
あの頃に戻ってみませんか。

神戸大学文学部ホームカミングデイ2011 10月29日(土)

詳細はうら表紙を

神戸大学学友会のご案内

神戸大学学友会は各学部同窓会の相互交流と大学の発展に寄与するため、同窓会の連合体として組織され、各学部同窓会から選出された人々による幹事会で運営されています。

具体的な活動としては、幹事会や大学役員との懇談会のほか、大学広報誌(KOBE university STYLE)編集委員会、神戸大学クラブ(KUC)運営委員会、データベース委員会などです。現在、学友会を構成している同窓会は下記のとおりです。

学友会会長は高崎正弘(凌霜会)会長、相談役は前会長の新野幸次郎氏、事務局は神戸大学企画部社会連携課となっています。

神戸大学学友会を構成している同窓会

- | | |
|----------------------------------|-------------------------|
| ●文窓会(文学部) | ●就進会(医学部保健学科) |
| ●紫陽会(教育学部・発達科学部) | ●社団法人 神戸大学工学振興会KTC(工学部) |
| ●社団法人 凌霜会(経済学部・経営学部・法学部・国際協力研究科) | ●六篠会(農学部) |
| ●くさの会(理学部) | ●翔鶴会(国際文化学部) |
| ●社団法人 神緑会(医学部医学科) | ●海神会(海事科学部) |

「神戸大学クラブ」(K・U・C)に入会しませんか

神戸大学卒業生が学部の壁を越えて、交流をはかり親睦を深める集いがK・U・Cです。神戸、大阪、東京でそれぞれ別々にいろいろな活動を展開しています。神戸K・U・Cは元町の牡丹園に事務所を開き、講演会、読書会、ゴルフ、旅行など、楽しい催しを実施しています。

ご入会ご希望の方は TEL 078-334-1323 までご連絡ください。詳しいパンフレットをお送り致します。

(K・U・C運営委員 日高 健一)

NEWS

2012年秋学期より、オックスフォード大学東洋学部との共同による「神戸・オックスフォード日本学プログラム」がスタートします。同学部日本学専攻の学生12人が文学部へ！今後は毎年学生を受け入れる予定とのこと。新しい大きな変化が起こりそうです。ご期待ください。

文窓会ホームページをご利用ください！

卒業生や大学関係者のみなさんの交流の場です。イベント告知や卒業後の近況報告、創作作品の発表、さらには自分のブログやホームページの紹介など、いろいろな形での利用が可能です。利用を希望される方は下記メールアドレスまでご連絡をお願いいたします。

(担当：坂本／文窓Web担当、社会学32回生)
kobeuniv.sakamoto@gmail.com

編集後記

東日本大震災で思わぬご不幸や有形無形のさまざまな被害にあわれた皆さまに、心よりお見舞い申し上げます、安らかな日常が一日も早く訪れることをお祈り申し上げます。震災後しばらくして、「文窓」8号(2010年)に新社会人として勤務地の岩手からコメントを寄せてくれた塚本京平さん(社会学専攻)に連絡を取り寄稿を依頼しました。快諾いただき、夏も終わる頃、岩手朝日テレビの報道制作部記者・レポーターとしての体験や思いが率直に綴られた「被災地報告」が届きました。テレビや新聞とはまた違った「近さ」で被災地の方々を思っていただけのではないのでしょうか。塚本さん、ありがとうございました！ご寄稿いただいた皆さまに厚くお礼申し上げます。

(たなかむつこ／むとうみやこ)

表紙の題字は、文学部国文学教授 福長 進先生にご依頼しました。

<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/> (検索→文窓会)

振り返れば六甲の山並み～あの頃の友に会いたい

第6回 神戸大学&文学部ホームカミングデイ2011

— Kobe University Homecoming Day 2011 —

10/29 土

神戸大学ホームカミングデイ2011

午前中:NHK住田功一アナの司会で記念式典。記念講演は、野村ホールディングスCFO中川順子さん(1988年文学部卒)。出光佐三記念六甲台講堂(※招待者のみ)

※詳しくは下記のホームページをご覧ください。

第6回 神戸大学 ホームカミングデイ

<http://www.kobe-u.ac.jp/hcd/2011/>

文学部ホームカミングデイ2011



KOBE
UNIVERSITY

< 併催企画 > 13:20～16:30

(文学部 B棟132号室前)

- ・地域連携センター ・海港都市研究センター
- ・倫理創成プロジェクト
- ・日本語日本文化教育インスティテュート
- ・大学院教育改革支援プログラムによる展示

■お問い合わせ先 人文学研究科総務係

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 Tel: 078-803-5591

文窓会(文学部同窓会)ホームページ

<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/>

13:00～13:30	受付 文学部 B棟132号室
13:40～13:40	文学部長挨拶
13:40～14:30	学生による留学報告等
14:30～15:00	学生による研究報告
15:10～15:50	第5回文窓賞(学生レポートコンテスト) 入賞者授賞式
15:50～16:10	文窓会総会
16:20～18:00	懇親会 瀧川記念学術交流会館 (参加費: 3,000円)

※第5回文窓賞(学生レポートコンテスト)入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。

(昨年の文学部ホームカミングデイの様子です。)

2010年10月30日(土)に開催の第5回文学部ホームカミングデイの様子です。

釜谷文学部長のごあいさつに引き続き、渡邊孔二名誉教授による講演会「ジョナサン・スウィフトの自伝的断片をめぐる」、第4回文窓賞(学生レポートコンテスト)入賞者授賞式と、アカデミックさとアットホームな雰囲気がとけあう非日常の世界を満喫。

文窓会総会終了後は瀧川記念学術交流会館に移り、教職員・在校生の皆さんと一緒に楽しいひとときを過ごしました



今年もぜひ誘い合わせてご参加ください!!

■文窓会HPフォトギャラリーで当日の様子をお楽しみいただけます。

文窓会ホームページを開き、<イベント報告>→<ホームカミングデイ>→<第五回ホームカミングデイ【フォトギャラリー】文学部編>へと進んでください。

文窓会主催・卒業記念ウェルカムパーティ(3月25日)もフォトギャラリーでご覧ください。